



付 3 1 話 コンピュータオタクの優越感

あなたが友人に**オタクだと告げると、その反応はネガティブで、場合によっては薄気味悪く見られる。あなたがオタク族であっても、何も卑下することはない。社会学者が勝手に分類し、特徴付けた特性を、社会が真に受けているに過ぎない。実態は千差万別、それほど簡単に特徴付けられるものではない。

そもそもオタクとは 1970 年代に日本で誕生した呼称で、主に大衆文化の愛好家を指すといわれる。例えば、漫画やアニメ、アイドル、パソコンなど、熱中する人々を揶揄する意味から派生した言葉であり、その中には、彼らに対するネガティブな感情が含まれる。現在はより広い領域の人々を含み、実態は複雑である。いずれかの分野やその一部で熱中・没頭し、知識や物を収集する人物を**オタクと呼び、自称する。

似た言葉にマニアがある。例えば、切手収集マニア、恐竜発掘マニアなど。社会学者はその違いを、その行為自体を他者は理解可能だが、オタク族の行為は理解不可であるという。また、マニアにはその興味の対象に性への意識はないが、オタク族にはあるという。その他の社会学者も、各種の違いを述べているが、適切であるようでない。つまり、何かに熱中・没頭する人種は多種多様、そもそも一括りで特徴付けられるものではない。型にはめた見方をしない方が良い。自分がオタク族であると思えばそうであるし、マニアであると思えばマニアなのだ。その境界もなく、特徴もない。強いて言えば、何かに熱中・没頭する人種の総称である。学者や研究者も同様で、一種のオタク族である。オタク族の成れの果てといった方が良くかもしれない。使命感や金のために研究課題を決めるわけではないが、没頭できる研究対象で、生活が維持できれば、こんな幸せなことはない。そうでなくても、夢中になれる何かを持つことは、人生を豊かにする。同類のオタク同士、うんちくを語り合え、楽しい時間が過ごせる。読者諸君、是非没頭できる何かを見つけ、オタク族になろう。「何！もうなっているって、おっと、これは失礼」。

50 年間の長きにわたりコンピュータオタクを自称してきた。この間、講義を受けてコンピュータを学んだことは一度もない。つまり、本や体験による知識であり、我流である。最初は、1 年間通信教育でコンピュータの基礎を学んだ。周囲は建築の学生ばかりでコンピュータの知識は皆無、将来、建築でも必要になるとふれ回り、一人優越感に浸ることになる。実際はコンピュータに触ったことも見たこともない。

3年次からのゼミでは、M先生の手伝いでコンピュータに触れる機会を得た。FORTRANを用いた応力解析用プログラムの開発を行うため、といっても、実際は使い走りではあるが、それでも大いに優越感に浸り、せっせと研究室とコンピュータセンターを往復した。M先生にそそのかさされ、4年次だったと思うが、その年に創設された情報処理技術者認定試験を受けることになる。夜行で出かけ、朝、東京駅に着くと、札幌医科大学の和田教授が国内第1例目の心臓移植に成功した、という新聞記事を見た。何故か、この様子を鮮明に記憶している。試験の内容はほとんど覚えていないが、自分の狭い知識ではとても答えられない問題であり、特に事務系の問題が多かったと記憶している。無論、不合格。それまで、少し慢心していたが、すっかり意気消沈である。

コンピュータオタクは自分のコンピュータが欲しい。しかも周囲を見渡して、最も良い、つまり一番のコンピュータが欲しい。一番の意味は、人によって異なる。計算スピードが速い、グラフィックディスプレイが大きくて反応が速い、記憶容量が馬鹿でかい、周辺機器が充実している、などなど。最初はやはり処理能力が速く、自分専用の計算機が欲しかった。スーパーコンピュータの予算獲得審査で「2番ではいけないのか、2番では」といった政治家がいた。無論、一番を狙うのが上策だ。彼女は物作りの人種、つまりオタク族の特性を理解していない。最初から一番を放棄すればやる気を失い、プロジェクトは失敗につながる。一番になろうとするからこそ、徹夜してでもモノ作りに励む。自身も予算の範囲内ではあるが、一番のコンピュータを手に入れたいのだ。

その甲斐あって、大学内では常に一番を手に入れてきた。学科にはTSSシステムを構築して数値計算の講義を始めた。LANを敷設して研究室から大型カラープリンターに出力可能とした。我が研究室でも、ミニコンピュータを初めて導入し、ワークステーションもSunやグラフィック用のTitanを設置した。パソコンもいち早く導入し、研究や教育に使用した。これらの仕事はコンピュータオタクを常に満足させる。

SPACEを公開して10年程度経過し、世の中に漸く認知された頃、友人の研究者が「SPACEは市販のソフトと遜色ない」と褒めてくれた。きっと称賛したつもりだろうが、その言葉に大いに不満である。全ての機能で市販ソフトを凌駕しているとは言わないが、ある部分先進性があり、優れている。解析スピードは速く、市販では解けないモデルも解け、ポスト処理のグラフィックが素晴らしいと自負する。これらの凄さを理解できる人達が、ネットやその他の場所で声を挙げたとき、初めてコンピュータオタクは心の中で「やったね」と、ほくそ笑む。